総主題　虹の架け橋を見上げて
副主題　平和、寛容、多様性へ

日本福音ルーテル教会
女 性 会 連 盟

会 報

26期 172号
2026年4月15日発行

わたしは雲の中に虹を置く。
これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。
創世記９章13節

主が支えておられるから

日本福音ルーテル拳母教会
日本福音ルーテル刈谷教会
牧師　室原　康志

【賛歌。ダビデの詩。】
主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。
主はわたしを青草の原に休ませ
憩いの水のほとりに伴い
魂を生き返らせてくださる。
主は御名にふさわしく
　　わたしを正しい道に導かれる。
死の陰の谷を行くときも
　　わたしは災いを恐れない。
あなたがわたしと共にいてくださる。
あなたの鞭、あなたの杖
それがわたしを力づける。　詩編 23 編１～４節

2026 年を迎えるときに、１年間の教会活動と自分の体調のことなどを考えながら過ごしていました。若いと思っていた自分ですが、いつの間にか 50 代後半を過ぎています。日々の生活を送るなか、友人と連絡をしたときの会話の多くが健康の話題になるのも、齢を重ねてきたからでしょう。自らの体力が徐々に衰え始めることに気付くと、どうにか老いに対して抗いたい気持ちも出てきます。

教会の集会などでお話しするときに「自ら置かれた現状を受容する（イエスさまに委ねる）」ことをお勧めしますが、自分自身の体調がすぐれないときなどは、心が揺らぎ続けてしまう弱さも露呈してしまいます。自分の弱さを認識しつつも“みことば”を語るとき、自らにも語りかけることとなります。そのような状態の時、教会員の方々の“イエスさまに委ねられた姿”が、私を奮い立たせてくださいます。

１月中旬から２月上旬、担当教会会員３名を神様のもとへ送り出すことになりました。３名の方はそれぞれに病を抱え、病と共に毎日を過ごされました。

Ａさんは 20 年ほど前に病の症状が現れました。診断によれば本来、妊娠・出産が困難な身体だったそうです。二人のお子さんを授かっていたことは、主の恵みだと語られました。10 年ほど経過してから、もう一度症状が現れ、医師からは重い荷物を持つことも避けるようにと言われます。しかも、病状は突然襲うこともあり、Ａさん曰く「いつ神のもとに召されても不思議ではない」と毎日を送られていました。教会学校でお話をされるとき「私は神様に生かされている。毎日を大切に過ごしています」と、力強く話されていました。神様のもとに召される直前の日は、親子４代で穏やかな一日として過ごされています。

Ｂさんは 40 代頃に伝道師の働きをされ、現場を退かれた後も教会での奉仕に務められていました。病を患ってからも体調を整え礼拝を大切にされ、周囲の方々を覚えての祈りを捧げられていました。召される直前まで、讃美歌を口ずさみ、祈られています。

Ｃさんは 2025 年に病が見つかり、余命宣告を受けました。そのような時でも、教会奉仕のことを気にかけてくださり、お母様を神様のもとへ送る働きもされました。半年後の納骨式の道中、確かな足取りで歩まれていました。その１週間後に神様のもとへ召されます。

３名の方は病に対して抗うのではなく、病の刻も主の恵みの刻であると信じた姿がそこにありました。主が共におられるとの信頼が、最後まで穏やかに過ごさせてくださったと確信します。“あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける”と。